

されたと考えられることを主張する。

最後に、簡単に紹介者の感想を述べさせていたきたい。まず、公職者弾劾裁判の背景には、政敵との抗争など、複雑な事情があったのであり、その中で実際に民主政防衛という民衆の意識がどれほどの重要性を占めていたのか、という点についてはより深い議論が必要であるように思われた。

もつとも、本書が一般向けに著されたことを考えれば、詳細な議論を求めることは酷であるとも言える。さて、紙面の都合上紹介しきれなかったが、本書にはアテネ民主政にまつわる豊富なエピソードが巧みに包含されている。多くの知見に触れつつ、分かりやすい叙述によってまとめ上げられた本書は、古代ギリシアの民主政に関心を持つ者にとって格好の入門書となろう。さらに、現代の価値観を押しつけることなくアテネ民主政の実態を描き出すとする著者の姿勢は、広く歴史を学ぶ者にとって参考となるところがあるのではないだろうか。

(B5判 二二三頁 一九九七年十一月  
東京大学出版会 二八〇〇円)

(庄子大亮 京都大学大学院生)

樋口隆康著

『昭和28年』

### 椿井大塚山古墳発掘調査報告

(京都府山城町埋蔵文化財調査報告書  
第二十集)

椿井大塚山古墳(京都府相楽郡山城町所在)は、古墳時代の研究を大きく前進させた古墳として名高い。三十六面以上に及ぶ大量の出土鏡のうちの大部分が三角縁神鏡であり、これをもとに小林行雄氏の著名な同範鏡論が生まれた。邪馬台国から大和政権への移行を考古学的に説明した学説として学界に大きな影響を与えた。また最古の古墳として、その出土品は古墳編年の基準資料に位置づけられている。

鉄道工事中にこの古墳の後円部から石室が露呈するとともに、大量の副葬品が発見され、緊急調査が実施されるに至ったのは昭和二十八年三月のことであった。連絡を受けた京都大学考古学研究室が中心となって石室と墳丘の調査、残存した副葬品の記録、散逸した遺物の回収をおこない、それ

らを研究室に持ち帰って整理をすすめた。

調査結果は同年九月、樋口隆康「山城国相楽郡高麗村椿井大塚山古墳調査略報」(『史林』第三十六卷第三号)に概略が発表された。そして昭和三十九年には梅原末治「椿井大塚山古墳」(『京都府文化財調査報告』第二十三冊)の刊行が企図されたが、出版上のトラブルから広く公表されることなく、結局正式な調査報告書は未刊という状況にあった。当時調査現場を担当された本学名誉教授の樋口隆康氏が本書を發刊することにより、調査後四十五年を経てようやく調査報告書が公にされたということになる。

本文の構成は次の通りである。

序 章 発見の顛末と調査の概要

第一章 遺跡の状況

第二章 出土遺物の解説

第三章 結語

参考文献

付論 椿井大塚山古墳出土鏡の化学成分と鉛同位体比(改訂)

上記のような事情から本書の著者は、当時準備していた報告内容をできる限りそのままに近い形で掲載することにした。序章から第三章まで、調査後にまとめた原稿を

ほぼそのまま採用し、改訂部分は同範鏡例の追加など最小限に留めている。ただし山崎一雄・室住正世・馬淵久夫・平尾良光氏による付論では新しいデータが盛り込まれている。

調査の前に石室の大半が荒らされており、また出土品の一部が隠匿されるという事態も発生した。したがって既に破壊されていた部分、副葬品の本来の配置と総数などを復原するためには、工事関係者からの聞き取りや、散逸した出土品の回収に至る経緯などの情報が重要である。著者は序章と第一章にそれらの情報を丹念に収録している。石室脇に存在したとされる粘土と石積みによる構造物から三面の鏡が出土したとされていたが、そのうちの一面が画文帯神獸鏡であったことが今回の報告ではじめて明示された。また粘土床周囲に残存した鉄器の出土位置も細かく示された。

鏡は復元前の写真を掲載しており、実物部分を区別するのに便利である。铸造後の研磨など、仕上げの技法についての観察と記述が充実している点も興味深い。製作技法についての細かい研究が進められている古鏡研究にとって有益な情報である。鉄器

類はごく小さな破片に至るまで図版に掲載され、計測値とともに表にまとめられている。多数出土した鉄鍔の全容が図版で示されるのははじめてのことである。鏡に注目が集まりがちであるが、種類の豊富な鉄器類の重要性をあらためて認識させる。

椿井大塚山古墳では昭和二十八年以降も、発掘調査が数度にわたって実施されている。特に現在も進行中の地元山城町教育委員会による発掘調査では、段築や墳丘裾、墓壙など、古墳の規模や構造に関する重要な成果があがっている。出土品についてもこれまで膨大な研究が積み重ねられており、新見も多い。本書の刊行によって、この重要な古墳を総合的に評価するための基礎が据えられたことを慶びたい。

(B5判 本文九十二頁 コロタイプ図版  
四十一枚 一九九八年三月 編集発行京  
都府山城町 印刷真陽社)  
(森下章司 京都大学大学院文学研究科助手)

## 編集後記

秋の学会シーズン、いかがお過ごしでしょうか。遅ればせながら、八一巻の五号をお届けします。おかげさまで、本号も充実した内容になりました。ご吟味下さい。

収穫期の台風で、野菜もお米も値の張る今日このごろ。日々の生活が、窮屈に感じられます。三八年ぶりの横浜リーグ優勝は、そんな中で一服の清涼剤だったといえます。私も「敵」を確認しながら、生業に学業に専念する所存です。(及)

本誌には文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費が交付されております。

一九九八年八月二五日印刷 定価二二〇〇円  
一九九八年九月一日発行 送料六〇円

史 林 第八一卷第五号(通巻第四一一号)

京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部内

発行人

史 学 研 究 会  
振替京都〇〇七〇二一五五番  
理事長 礪 波 護

印刷所

中村印刷株式会社  
京都市南区上鳥羽藤田二九